

「道德科学研究フォーラム」を開催

道德科学研究所

二月十七日・十八日の両日、生涯学習センターにおいて「道德科学研究フォーラム」を対面とオンラインで開催し、全国から百七十名が参加しました。

「温故知新く財団創立百年と新たな変革の時代に向けて」をテーマに、四つの個人発表と三つのシンポジウムを実施。参加者、聴講者からの質疑も多く、活発なフォーラムとなりました。

【個人発表】

(1)大野 正英(研究主幹・教授)

「AIがわれわれに問いかけるもの」

(2)大塚 祐一(客員研究員)

「企業における新たな自己規定としてのパーパス」

(3)梅田 徹(客員教授)

「道徳的因果律をどのように理解すべきか——最高道徳的な『生き方』を中心に考える」

(4)宗 中正(副所長・教授)

「最高道徳の本質を考える——①神の『無条件性』②人心開発救済と『伝統の原理の教育』」

【シンポジウム】

(1)「日本の超高齢社会における生・老・病・死…モラロジーの視点から」

講演…中山理(麗澤大学大学院 特別教授、モラロジー道德教育財団 特任教授、道德科学研究所 客員教授)

モラロジー道德教育財団 特任教授、道德科学研究所 客員教授

モラロジー道德教育財団 特任教授、道德科学研究所 客員教授

コメンテーター…竹内 啓二(客員教授)

小山 高正(客員教授)

コーディネーター…竹中 信介(研究員)

このシンポジウムでは、コーディネーターを務めた研究員の竹中信介が登壇者の紹介およびスケジュールの説明を行った後、中山理客員教授による講演が行われました。「人生百年時代」と言われる今、はたして私たちはいかに老年期を迎え、いかに過ごすべきなのでしょう。講演では、さまざまな統計データや最先端の科学研究の成果を引用し、老年期における身体的な衰えや「病」が懸念される一方で、精神的成熟が期待されること、ま

た「死」も最新の量子物理学の世界では私たちの常識とは違った美しい風景として見えてくることが強調されました。

続いて、竹内啓二客員教授はエウダイモニア(幸福)の視点から、徳倫理学や死生学の成果に基づいて講演を補足するコメントを行いました。その後、小山高正客員教授は、講演で触れられた「老年的超越」について、その内容を補足しました。老年期は一般に悲観視されやすい傾向にありますが、希望が持てる側面があることを指摘しました。

討論セッションでは、「自我没却」と「自己超越」の関係や、量子物理学から見た「生と死」をめぐる問題などについて深く掘り下げられました。(竹中信介)

(2)「財団創立百年の歩みを振り返る」

発表者…

橋本 富太郎(主任研究員)

「廣池千九郎とその時代」

矢野 篤(廣池千九郎記念館 副館長・研究員)

「廣池千英とその時代」

宮下 和太(副所長・主任研究員)

「廣池千太郎とその時代」

コーディネーター…宮下 和太

本財団はまもなく創立百年を迎えることになるが、この百年の歩みを振りかえることは



未来に向けて本財団がどのように進んでいくかを考える上での最も重要な足がかりとなります。このシンポジウムでは、本財団のあり方を踏まえて、廣池千九郎・千英・千太郎の各所長とその時代背景をテーマとして財団創立百年の歩みを振りかえることを企図したものです。とりわけ彼らが先代から何を継承し、次代に何を伝えようとしたかを意識しながら歩みを振りかえることを試みました。

橋本報告「廣池千九郎とその時代」では、財団前史と黎明期から、道徳科学の確立と展開までが必然的な流れとして生じてきたことが述べられました。また、現在の諸問題への解決策のヒントが千九郎の数々の事跡・業績のうちに豊富に示されていることが強調され、今なすべきこととして廣池千九郎研究の

深化と発展があることを論じています。

矢野報告「廣池千英とその時代」では、千英が千九郎の事業をどのように継承し、戦後に事業を発展させたかが報告されました。なかでも、昭和十六年の研究所閉鎖から昭和二十一年の研究所復活に至るまでの経緯を中心に千英がどのようにその難局を乗り越えてきたかが述べられました。

宮下報告「廣池千太郎とその時代」では、千太郎が昭和三十一年に研究部幹事長に就任してモラロジの研究を先導してきたこと、生涯にわたって一貫して科学性、社会性、国際性を強調して財団の諸活動を推進してきたことについて述べられました。

シンポジウム全体を通じて、こうした歩みを踏まえて現在及び未来をどのように位置づけて捉えるかが大きく重要な問いとして眼前にあることが確認されました。

(宮下和太)

江島 頭一(主任研究員)

「『図解』の学習法」
コーディネーター…冬月律

このシンポジウムでは、執筆と冊子化に携わった三名に登壇していただきました。コーディネーターの冬月律による趣旨説明の後、望月文明が「執筆と冊子化に携わって」、木下城康が「イラストで描く道徳実践のダイナミズム」、江島頭一が「『図解』の学習法」をテーマにそれぞれ報告しました。

報告では、「『図解』の書籍化に対する意図や特色、活用法などを振り返りました。特に、図解においてはテキスト内容を単に図や表にするだけではなく、「伝えたいこと」と「伝えるべきこと」のバランスをとること、他者の意見や作品からの気付きを得ることなどの重要性が強調されました。また、モラロジ学習教材を図解化(構造化・視覚化)することで、新たな視点からの学習機会を提案できる可能性についての報告もありました。図解化による「分かりやすさ」には限界があるものの、学習への関心や意欲の向上、モラロジ概念の柔軟な理解を促す可能性が開かれていると思われまます。

各報告後の質疑応答では、会場内の参加者やオンライン参加者を交えた活発な議論が行われました。

(冬月律)

(3)「図解で学ぶモラロジ」
発表者…

望月 文明(研修企画課長、開発企画部長)

「『図解 モラロジ』概論」——執筆と冊子化に携わって」

木下 城康(主任研究員)

「イラストで描く道徳実践のダイナミズム」